

平成二十一年度 入学試験問題 国 語

文・教・経・医―医 二月二十六日(木) 一四・一〇―一五・五五
理(□のみ) 一四・一〇―一四・五五

注意事項

- 1、試験開始の合図まで、この冊子と答案紙を開いてはいけない。
- 2、問題冊子のページ数は十一ページである。
- 3、問題冊子とは別に、答案冊子中の答案紙が文学部、教育学部、経済学部と医学部医学科志望者には三枚、理学部志望者には一枚ある。
- 4、落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所などがあつたら、ただちに申し出よ。
- 5、理学部志望者は、□のみを解答せよ。
- 6、解答にかかる前に答案紙上部の折り目をていねいに切り離し、それぞれ、所定の二箇所を受験番号を記入せよ。
- 7、解答は答案紙の所定の欄に記入せよ。所定の欄以外に書いた解答は無効である。
- 8、問題冊子の余白は草稿用に使用してもよい。
- 9、試験終了後、退室の許可があるまでは、退室してはいけない。
- 10、答案紙は持ち帰ってはいけない。問題冊子は持ち帰ってもよい。

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

いまの日本で、日常生活において人が「政治」と口にするとき、そこにこめている意味はどういうものか。もちろん、それを完全にモウラして^aコクメイにする^bような調査は不可能である。だが、日本語の用例をタンネン^cに集めて作られた国語辞典の語釈が、執筆者の判断を通じたものとはいえ、その最大公約数のようなところを伝えて見えていいだろう。そうした辞書の代表として、山田忠雄を主幹として編まれた『新明解国語辞典』(三省堂、初版一九七二年)が、興味^①ぶかい例を示している。

この辞典は、第二版(一九七四年)までは、「政治」を、「社会を住みやすくするために、国や地方の大きな方針を決めて実行させ(る)こと」と説明していた。ここで、「大きな方針」を決めることと、その決定を^d実行させることとの、二つの段階に触れているところが意味ぶかい。「実行」を命じられる受け手は、「国や地方」の政府、とりわけ行政機関であろう。みなで「社会を住みやすくするため」に方針を論議し、その結論の実施を権力者に迫ってゆく一般人の営み、それこそが「政治」ということになる。政策をしあげ執行する、政治家や官僚の動きは、このあとに続く実施過程にすぎないのである。

もつとも、「政治」の項目に続く「政治家」の語義説明に、「政治に携^dわる人」とあることからさかのぼると、「大きな方針」を決める「政治」の主体としては、中央と地方の立法院に集う議員や、あるいは行政府の頂点にたつ内閣と地方自治体の首長を想定していたと読むこともできる。だが、とりあえず「政治」の項目を見るかぎりでは、そう限定しているわけでもない。

この辞書は、第三版(一九八一年)になると、「政治」の語釈を大幅に入れかえている。こんどは、「住みやすい社会を作るために、当局者が立法・司法・行政の諸機関を通じて国民の生活を指導したり取り締まったりすること」が、「政治」であるときされた。ここで司法活動まで「政治」に入れているのも、おもしろい問題を含むが、それはともかくとして、「当局者」、すなわち政治家と官僚が、上から人々を統治する営みへと、「政治」の意味内容が大きく変わっている。前にあった地方自治への言及も消えて、「国民」を対象とする国家の規制活動へと、「政治」は限られてしまった。

また、「政治家」項目の語義説明も、第三版では「国会議員・地方議員など、自分の政見を直接政策の上に反映させること出来る立場に在る人」と詳しくなり、「政治家」が、みずからの「政見」をもとにして、「政策」に影響を及ぼすという印象が、前面に出るようになった。これには補足説明がついている。「俗に、政治的手腕を持つ人や、根回しの上手な人の意にも用いられる」。——「政治的手腕を持っている人」「策略をめぐらす人」という、「政治家」の俗語としての用法は、第一版・第二版でも挙げられていたが、こんどは、一般に道徳上の評判がかんばしくない「根回し」まで、登場することになった。

一九七〇年代から八〇年代にかけて日本社会の保守化が進んだ、あるいは、政党政治の腐敗が深刻になった、という背景を、この変化の奥に読み取るむきもあるかも知れない。だが、むしろこれは、日本人が抱く「政治」観の両極を示していると思われる方がいいたろう。この社会で、「政治」という言葉が抱かせる印象は、一方では活発な市民参加、他方では権力者による統制と、はてしなく遠い二つの極の間を、つねにユレ動いている。そして、「政治」の意味すら安定せず、とらえどころがないがゆえに、たとえば政治家の腐敗といった、ほんらい個人道徳の問題にすぎない事柄が、いわゆる「政治問題」の中心として、取りざたされることにもなってしまう。

一面から言えば、^②「政治」像のこうした分裂は、近現代の日本人の宿命とも言える。「政治」という漢語それじたいは、中国古典の『詩経』^注に見えるので、もともと日本人にとってキイなものではなかったが、前近代の文献では、さほど多くは用いられていない。近代になって、欧米の書物に見える「politics」の翻訳語として用いられ、初等教育や新聞・雑誌を通じて広まったことで、一般の人々のジョウヨウ語となったのである。

もちろん、たとえば「まつりごと」といった和語の意味あいが入りまじる場合もあるだろうが、ふつうに日本人が口にする「政治」の言葉は、欧米の政治思想のなかで議論されてきた「政治」の概念に、主として由来すると見ていい。学問としての「政治学」も、もちろん、日本では鎌倉時代や徳川時代には存在せず、明治時代になってから、欧米の学問を輸入することで始まっている。

しかし、その本場の欧米でも、「政治」についてどう考えるかは、時代によって大きく変化してきた。十九世紀後半の開国以来、そうした幅をもった「政治」の概念を、日本人は一挙にとり入れたのである。そうして、ここ百年以上、欧米の政治制度や政治思想を受容し、そこに息づいている概念をもとにしながら、「政治」を論じ、さまざまな制度をしつらえてきた。

現代米国の政治学者、シエルドン・S・ウォーリンは、著書『政治とヴィジョン』(一九六〇年、邦訳題『西欧政治思想史』)でトマス・ホッブズの思想を論じるなかで、欧米の政治思想の伝統が、ほんらい前提としてきた、「政治的なるもの」を定式化する試みを行なっている。

その理解によれば、「政治的なるもの」は、三つの要素からなる。第一に、全体を指導し、ほかのさまざまな活動を統御することを仕事とするような、権力の存在。次に、構成員であることをみずからうけいれた人々に課される義務。そして最後に、公共の空間に何らかの意義をもつような行動をとりしきる、共通のルールの体系である。この「政治的なるもの」の起源には、たとえばアリストテレスが念頭においていた、古代ギリシアのポリス注における、市民たちの営みがある。自由人として対等な人々が、おたがい共通にかかわる事柄を管理するために、一つの法のもとに結合して、秩序の全体を統御する権力をつくりあげる。そうした公共の紐帯hを保つなかで、人々はそれぞれに相応の義務を果たしながら、権力が法にはずれたふるまいに出ないよう、監視を続ける。

欧米の思想における「政治」像の古典は、こうしたものであった。もちろん、時代の変化につれて、国家のあり方は、その大きさからしても、支配権力の構成からしても、古典古代の都市とはまったく異なるものに変わっていった。しかし、時代が変わっても、「政治」が論じられるさい、とりわけ権力者による圧制が批判される場合には、こうした「政治」像がしばしば呼びおこされることになったし、現代でも、ウォーリンその人も含め、活発な市民参加を唱える政治論などに、大きな影をおとしている。

しかし他方、十六世紀の西欧では、ポリスのような市民の共同体とは大きく異なる、近代主権国家という強大な支配機構が登場を見ることになる。ここで成立した国家は、自由人の集合であるポリスとは異なつて、絶対君主を頂点においた支配機構

として、思い描かれる。そして時代の変遷をへて、官僚制による行政活動と、選挙にもとづく議会政治が定着した二十世紀には、まったく異なった「政治」概念が登場し、広くうけいられるようになった。

第一次世界大戦の終結直後にマックス・ヴェーバー^注が、講演「職業としての政治」(一九一九年)で、「権力の分け前にあずかり、権力の配分関係に影響を及ぼそうとする努力」と「政治」を定義したことは、よく知られている。国内もしくは国際間の秩序において、権力の「コウシ」ⁱに影響を与えようとして競いあう、さまざまな団体や人間の姿。それを「政治」と見なす視点は、そのうち、政治学のみならずも現実政治を分析する分野を、大きく支えている。あるいは日常の会話でよく使われる例でも、先に『新明解国語辞典』第三版の例に見たような、「政治的手腕」といった言い方に、こうした「政治」像の片鱗を見ることができただろう。

つまり、人間のいかなる営みを「政治」と考えるのか、そのこと自体が、「政治」概念の本場であるはずの欧米においても、一つには定まっておらず、分裂を抱えている。何を「政治」と考えるかが、その人の政治的立場の表明にもなってしまうという。厄介な問題が、生じることもなるのである。

こんな問題が起こるのなら、欧米の思想に「イキヨ」^jすることをやめ、まったく新たな「政治」概念を作ればよい。あるいは、欧米思想を受容する前の「純粹」な日本の政治像に立ち返ろう。そのように考える人も、出てきて不思議はないが、実際にはむずかしい道である。日本人の思考は、すでに欧米由来の「政治」を前提としてものを考え、討議する言葉の体系を枠組として動いているのであり、その条件を超えることはできない。一面では、欧米の古典もまた、いまの日本人にとってはだじな「伝統」のよりどころなのである。

しかし、こういうことも考えられるのではないか。「政治」の概念をめぐる、さまざまな議論が行なわれ、それに関連する言葉の体系が作られたのは、たしかに西欧文化においてのみ、生じた現象であった。しかし、人と人とが物事を共同に行なう営みや、統治者が権力を用いて人々を支配する活動は、そのあり方が文化圏によって異なるにせよ、人間社会に広く見られる。そうした営みの中で、西欧のように「政治」としてはつきりと概念化されなくとも、何らかの知恵が実践の中で伝えられ、あるいは文献に書きとどめられることは、どの文化圏でもありうるだろう。

そうすると、たとえば前近代の日本について、人々が秩序についてどのように考え、実践してきたのかをとりだし、それを一種の伝統として再確認するというやり方も、現代の「政治的教養」の大きな柱として、大事なのではないか。もちろん、現代人が抱いている、欧米由来の「政治」像と、非欧米圏の古くからの思想文化とが、異なる論理によって支えられていることは、きちんとわきまえておかなくてはいけない。だが、みずからの育った文化圏のうちに伝わっていた、ものの考え方や実践をかえりみること、現代人が抱く「政治的教養」^⑤も、よりしつくりと身についたもののできるはずである。

(荻部直『移りゆく「教養」』による)

【注】

○詩経…中国最古の詩集で、孔子の編といわれている。

○シエルドン・S・ウォーリン…(一九二二～)アメリカ合衆国の政治学者。政治思想を専門とする。

○トマス・ホップズ…(一五八八～一六七九)イギリスの哲学者、近代政治学の祖とされる。著書に『リヴァイアサン』がある。

○アリストテレス…(紀元前三八四～紀元前三二二)古代ギリシアの哲学者。「万学の祖」として、その研究は論理・自然・社会・芸術のあらゆる方面に及んだ。

○ポリス…古代ギリシアの都市国家。

○マックス・ヴェーバー…(一八六四～一九二〇)ドイツの社会学者・経済学者。著書に『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』『職業としての学問』『職業としての政治』などがある。

問一 傍線部 a く j のカタカナは漢字に、漢字は読みをカタカナに、それぞれ改めよ。

問二 傍線部①について、どのような点が「興味ぶかい」のかを、六十字以内(句読点・かつこ類も字数に含める)で説明せよ。

問三 傍線部②のように言えるのはなぜか。「こうした分裂」の内容を明確にした上で、百字程度(句読点・かつこ類も字数に含める)で説明せよ。

問四 傍線部③「まつりごと」と同じ意味で使われている最適な表現を文中から二十五字以内(句読点・かつこ類も字数に含める)で抜き出せ。

問五 傍線部④の内容を示す最適な連続する二文を文中から選び、その最初と最後の五文字(句読点・かつこ類は字数に含めない)を記せ。

問六 傍線部⑤のように「政治的教養」と言う場合に、筆者が考える「政治」とはどのようなものか。百字程度(句読点・かつこ類も字数に含める)で説明せよ。

次の文章は、江戸時代後期の医者で、国学者・歌人の本間遊清による随筆の一節である。江戸市中にあった著者の家が火事で焼失したため、妻と十歳、七歳、二歳の三人の子とともに、郊外の山里にある小さなあばら屋で仮住まいをしている日々が書き綴られている。これを読んで、後の問に答えよ。

調度一つ置くべき所なければ、文机ふづくえもなく書かみもなし。手習はんにも法帖はみな焼けぬ。まして紙乏しく、筆もみなちびたればせんすべなし。これあがなはんには道遠し。まして五月雨降り続きて道いとあしければ、庵aをさし込めてかがまりをるに、日の長きこと、年のごとし。何やかやと思ひ出でて、しひて筆とらんとすれば、三人のわらはべ、所せきかたへに戯れ遊びて、あとさきしどろなることをさへつりあひて、いとかしがましければ、書きさすことしばしばなり。

五月雨よよし降らば降れ降らずとて人のとふべきこのすみかかは

よろづもの心にまかせねば、ややともすれば妻や子らや、うちも調じなましなど思ふ折々あるを、二つになれるをさな子の何事をもわいたためぬが、ゑみゑみとして、まだえ足も立たで、かなたにまろび、こなたにころげて、からうじてるざりよりて、膝の上になづさひ、袂たもとにすがりて、あああと言ひてむつれ遊ぶ。かかる折は、ひたぶる心のますらをもえあらがはじと思ふに、ましておろかなる親心にはいとかなしうて、あこよくこそはひ来つれとて抱き上げて、とさまかうさまもてあつかへば、いよいよむつれてひしと抱きつきて、いと小さき手をさし入れて、懐などさがすもいとあはれなり。

人は目もかけぬ小さき塵などを目にかけて、息もつきあへずはひよりて、二つのおよびしてつまみてまさぐり物にし、人も見よと思へるさましてさしいだせるなど、いよいよあはれなり。

兄のわらはが折りもてこし竹の子を見つけて、はひよりてとるままに、すなはち口にさしあてて雫しづくもよよと食ひぬらしなどする、いとをかし。

『蜘蛛くまのふるまひ』による。

【注】

○法帖 昔の名人の筆跡を拓本などにした書道の手本。

○調じなまし 「調ず」は懲らしめる意。

○わいたためぬ 「わいたむ」は弁別する、理解するの意。

○ひたぶる心 無情な、荒々しい心。

○人は目をかけぬ… 以下の段落は、『枕草子』の「うつくしきもの……二つ三つばかりなるち」の、いそぎてはひ来る道に、いと小さき塵のありけるを、目ざとに見つけて、いとをかしげなるおよびにとらへて、大人などに見せたる、いとうつくし「を踏まえている」。

○まさぐり物 いじつてもてあそぶ物。

問一 傍線部 a～d を口語訳せよ。

問二 「五月雨よ」の和歌について、作者の心情について説明を補いつつ、口語訳せよ。

問三 この文章の前半部と後半部との間で、筆者の心情はどのように変化しているか、説明せよ。

次の文章を読んで、後の問に答えよ。但し設問の関係で送り仮名を省いた部分がある。

王^{じゆん} 侗^ハ 字^ハ 少^ハ 林^ハ、廣^ハ 漢^ハ 新^ハ 都^ハ 人^ハ 也。侗^ハ 嘗^テ 詣^リ 京^ハ 師^ニ、於^テ 空^ハ 舍^ハ 中^ニ 見^ニ 一^ハ 書^ハ 生^ハ、

疾^ハ 困^ル、^{スルヲ} 愍^ハ 而^レ 視^ル 之^ヲ。書^ハ 生^ハ 謂^ヒ 侗^ニ 曰^ク、我^ハ 當^タ 到^ル 洛^ハ 陽^ニ 而^レ 被^リ 病^ヲ、命^ハ 在^リ 須^ハ 臬^ニ、

腰^ハ 下^ニ 有^リ 金^ハ 十^ハ 斤^ハ、願^{ハク} 以^テ 相^ヒ 贈^リ、死^ハ 後^ニ 乞^フ 藏^ニ 骸^ハ 骨^ヲ。未^レ 及^レ 問^ニ 姓^ハ 名^ハ 而^レ 絶^ル。

侗^チ 卽^ヒ 鬻^キ 金^ハ 一^ハ 斤^ハ、營^ム 其^ハ 殯^ハ 葬^ヲ。餘^ハ 金^ハ 悉^ク 置^キ 棺^ノ 下^ニ、人^ハ 無^シ 知^ル 者^ハ。後^ニ 歸^リ 數^ハ 年^ニ、

縣^ス 署^ヲ 侗^ヲ 大^ハ 度^ハ 亭^ハ 長^ニ。初^メ 到^ル 之^日、有^リ 馬^ハ 馳^ハ 入^リ 亭^中 而^レ 止^マ 其^日、大^ハ 風^ハ 飄^ル、

一^ハ 繡^ハ 被^ヲ、復^ク 墮^ル 侗^ノ 前^ニ。卽^チ 言^ヒ 之^ヲ 於^テ 縣^ニ、縣^ハ 以^テ 歸^ス 侗^ニ。侗^ハ 後^ニ 乘^リ 馬^ニ 到^ル 雒^ハ 縣^ニ、馬

遂^ニ 奔^シ 走^シ、牽^キ 侗^ヲ 入^ル 它^ノ 舍^ニ。主^ハ 人^ハ 見^テ 之^ヲ 喜^ビ 曰^ク、今^ハ 禽^レ 盜^ヲ 矣。問^フ 侗^ノ 所^ヲ 由^リ 得^ル

馬^ヲ。侗^ハ 具^ニ 說^キ 其^ノ 狀^ヲ、并^ニ 及^テ 繡^ハ 被^ニ。主^ハ 人^ハ 悵^然、良^ク 久^ク、乃^{ハク} 曰^ク、被^ハ 隨^ヒ 旋

風^ニ 與^レ 馬^ハ 俱^ニ 亡^ズ。卿^ハ 何^ノ 陰^ハ 德^{アリ} 而^レ 致^ス 此^ノ 二^ハ 物^ヲ。侗^ハ 自^ラ 念^ジ 有^ル 葬^ニ 書^ハ 生^ハ 事^上、因^リ 得^ル

說^キ之^ヲ并^{セテ}道^ニ書^シ生^ノ形^ノ貌^ヲ及^ヒ埋^{ムル}金^ノ處^ヲ。主^人大^イ驚^シ號^シ曰^{ハク}。是^レ我^ガ子^也。姓^ハ金
 名^ハ彥^ノ。前^ニ往^キ京^ノ師^ニ。不^レ知^ラ所^ヲ在^ル。何^ノ意^ハ卿^ノ乃^ハ葬^ル之^ヲ。大^ニ恩^{シク}久^ク不^レ報^ヒ。天^ヲ以^テ³
 此^ヲ章^ス卿^ノ德^ヲ耳^ト。恠^ニ悉^テ以^テ被^ト馬^ト還^ス之^ニ。彥^ノ父^ハ不^レ取^ラ。又^ク厚^ク遺^レ恠^ニ。恠^ニ辭^シ讓^シ而^{シテ}
 去^ル。時^ニ彥^ノ父^ハ爲^リ州^ノ從^シ事^ス。因^{リテ}告^ゲ新^ニ都^ノ令^ニ。假^シ恠^ニ休^ミ。自^ラ與^{トモ}俱^ニ迎^フ彥^ノ喪^ヲ。餘^ニ金^ヲ
 俱^ニ存^ス。恠^リ由^リ是^レ顯^{ハス}名^ヲ⁴。

(『後漢書』による)

【語注】

- 廣漢新都—地名。
- 京師—みやこ。
- 殯葬—遺骸を棺に入れて埋葬すること。
- 大度—地名。
- 亭長—宿場の長。
- 繡被—ぬいとりをしたふとん。
- 雒縣—地名。
- 恠—ほかの。
- 悵然—嘆くさま。
- 州從事—州の属官。
- 新都令—新都県の長官。
- 假恠休—恠に休暇を与える。

問一 波線部 a「悉」b「復」c「乃」の読みを、それぞれひらがなで記せ。

問二 傍線部 1「被_レ病、命在_ニ須臾_一」を現代語訳せよ。

問三 傍線部 2「未_レ及_レ問_ニ姓名_一而絶_レ」を書き下し文にせよ。

問四 波線部 d「卿」e「此_ニ物_一」は、それぞれ何を指すか、文中の語を用いて答えよ。

問五 傍線部 3「天以_レ此章_ニ卿德_一耳」は、どういうことをいうのか、説明せよ。

問六 傍線部 4「恠由_レ是顯_レ名_一」とあるが、それはなぜなのか、本文の内容を要約しながら百五十字以内で述べよ。